

R18
ADULT ONLY

KUROKEN

ST KUROKEN

ラブクエスト

LOVE QUEST



▼城の書庫でおもしろい本をみつけた

さすが
大王様

面白いもん
持ってんなア

たまには
お城キレイに
してよね
ア
回ちやん!

なんて言うから
片付けてたけどら

たまには
やってみる
もんだなる

おもしろそうな事は
ためさねーとな

で

それで、
俺を連れてきて
何の用なの

書庫整理してたら
面白い魔法
見つけてな

ケンマで
試そうと思って

俺を
巻き込まないでよ

俺以外でも
大丈夫でしょ
他の人で試してよ

明日朝早くから

いいじゃねーか
ケンマがいいんだよ

いつも新しいの
覚えたら俺に使うの
やめてよね…

まあまあ
いいじゃねーか

それって
連れてきてまで
見せるものなの

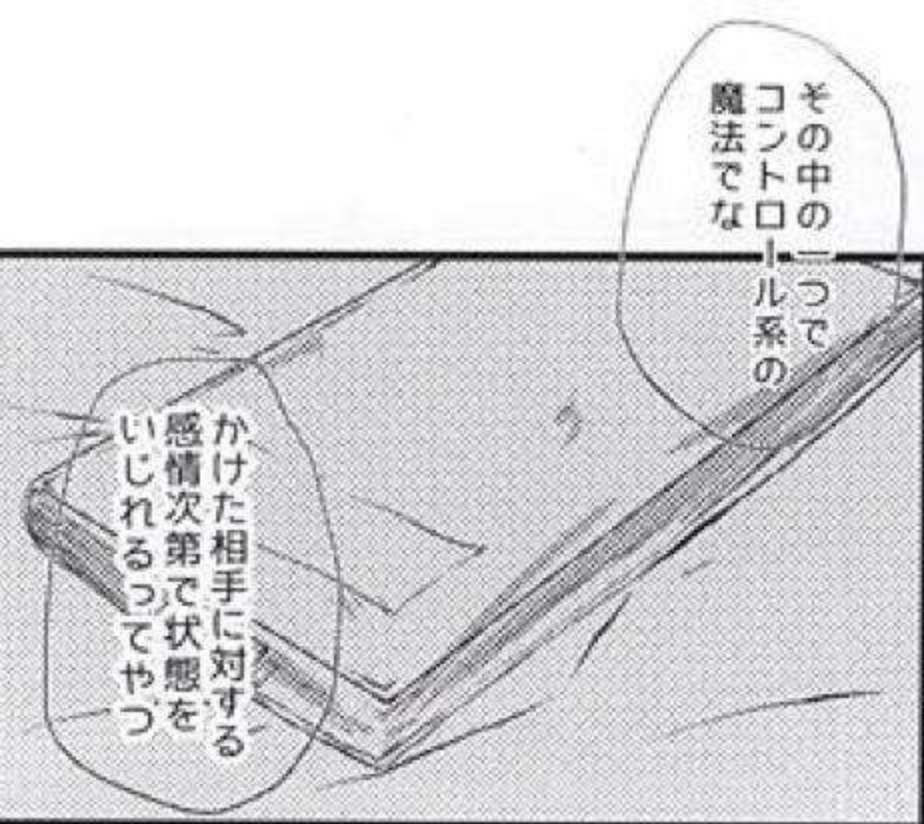
うーん

どっちかって
いうと

俺が見たいから
連れてきたん
だけ

な

ケニノマ



早速
効果でてる
みたいだな？

ケンマ

それって

ようは
媚薬だよな…

まー
まあ近いかな

感情次第で
媚薬にもなるし
劇薬にもなるけどな

簡単

身体が満足
すれば戻る

身体が
満足…って

発情した時の
満足って一つしか
ないだろ？

これって
どうやって
解けるの？





ケンマ

好きだなんて
思う自分に
一番怒ってる

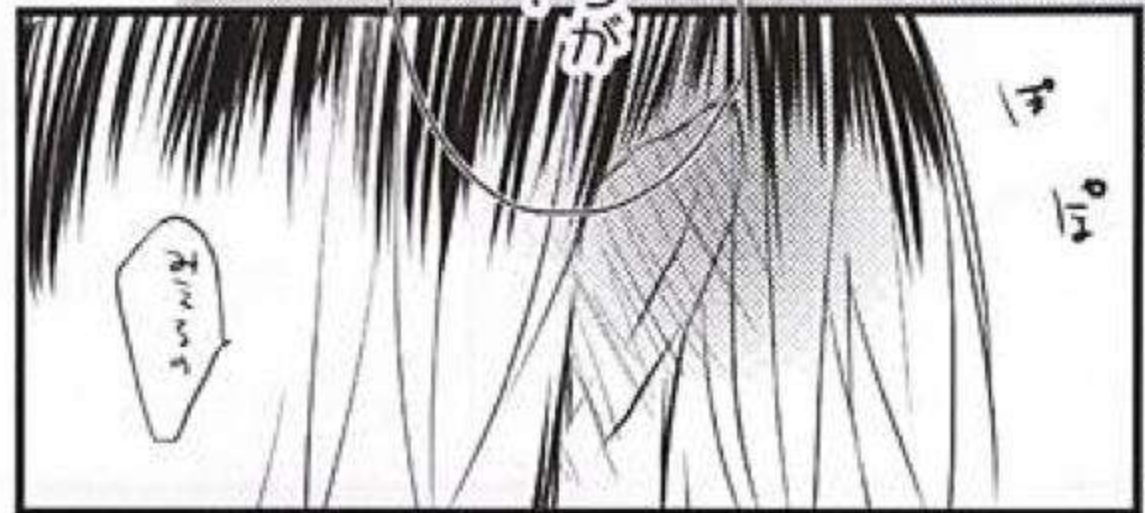


なあ
ケンマ



見えないのと
見えるのと

どっちが
いい?



ケンマ



ちやんと
力抜いとけよ



奥まで
はいつた...



クロの
熱いね...



なんか
今日のケンマ

いつもだったら
出てこない
ワードがでるな

魔法のせい
だし…

クロだって

いつもより
しつこいしり
と

きょうじょう

言うのが
珍しいって

言ってるだよ

正直この魔法あんまり期待してなかったけど

ケンマのこんな姿見れたのは期待以上だったわ

いつもなら声抑えるしな

ケンマ??

クロ





なあ？
ケンマ



あの魔法
禁止



なんでもかんでも試すのってクワの悪い癖だと思っ



言われると
思っていました

当たり前
でしょ



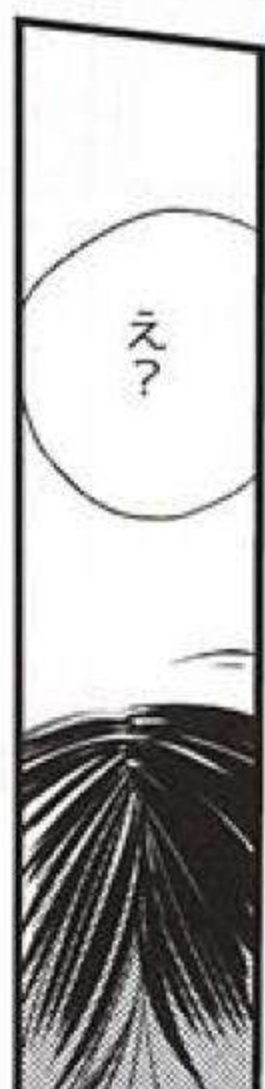
しかも遊ぼうという
人で遊ぶようない
俺を巻き込むの
ほんとやめてくれない

すみません

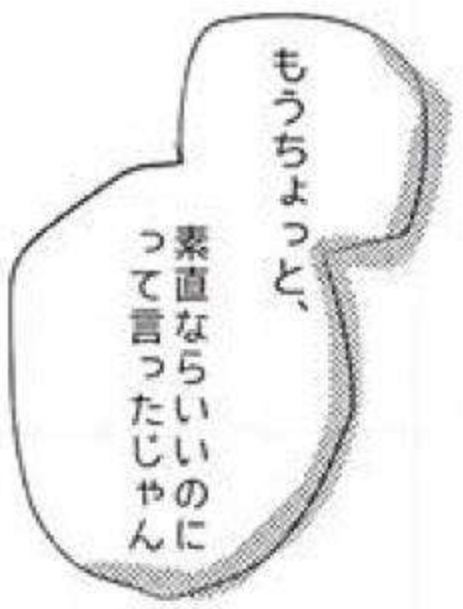


怒られると思っ
たけど想像以上
怒ってるぞ...

もういいかい



え？



もうちょっと

素直ならいいの
に
って言ったじゃん

キキ

もういつかい

キキ

キキ

セックス

キキ



キキ

キキ

お好きなだけ

キキ



side:勇者



この後イワズミが城に殴り込んだ

いつの世も悪は必ず現れる。

しかしその悪を砕く正義もまた、必ず現れるのだ。

幼い時からそう教えられてきたケンマは、古い文献の中の大王と勇者の画を空で思い起こすことができる。魔導師の村であるこのネコマ村からも、かつての勇者一行に加わった魔導師が何人も排出されていて、名譽の証として石造が建っている。

けれどそれはもう何百年も昔の話で、大王などまるでおとぎ話だと思っていたが、新たな大王が誕生する時が近付いてきていると村の長が予見した。そしてその大王を倒すべく立ち上がる勇者が、ケンマの唯一の村外にいる友人、ヒナタであるということも村内には知れ渡っている。

そして長が見たのはそれだけではなく、その勇者に同行することになる魔道士は、なんとケンマであり、勇者ヒナタと共に旅をすることになる、とはつきりと告げたのだった。

まさかそんな、と思ったが、長の予見は絶対で、ケンマは今まで一度たりとも予見が外れたのを見たことがない。

それ程までに強力な魔力を持っているので、長が高齢でなければ彼が大王を倒せばいいのにと村にいる魔導師全員がそう思うほどだった。

ケンマは一つため息をついて、旅支度を進めていた手を止めた。村に勇者がやって来て、ケンマが旅立つことになるのは明日と言われていたので、やれることは先にしておこうと準備を進めていたのだ。

「クロ」
近付いてきていたクロの魔力を察知していたケンマは部屋のドアが開くのと同時に名前を呼んだ。

「……やっぱり、行くのか」
パタン、と閉まったドアに目をやって、それからドアの前に立っているクロに視線を向けた。

「……うん、まあね。長の予見は、当たるから」
「そうだな……」

ケンマとクロは物心ついた時からずっと隣にいた。いわゆる、幼馴染というやつで、いつでも一緒だった。

クロの言うことを聞いておけばなんでも大丈夫だと幼い頃のケンマは思っていて、それが成長し一応一人前の魔道士と認められた今でも続いている。

修行が嫌いで、家に引きこもって魔導書ばかり読んでいるケンマをいつもクロが外に引っ張り出して一緒に修行をしている。面倒なこと嫌いで、人見知り。村の外に出ることもほとんどなく、村の人間ともあまりコミュニケーションが取れず、いつもクロの後ろをついて歩いている。

魔導師の村に生まれ、素質があるからと勧められるまま魔導師になったが、魔導師の力が必要になることなど、平和な今の世界では無いに等しく、もし必要になる時がくるとしたら、それは新たな大王が誕生し、その大王を討伐する勇者一行に同行する選ばれし魔導師、ただ一人だけだ。

知識はある方だが、特別な呪文が使えるわけでもなく、魔力が強いわけでもない。ケンマは自分のことを冷静にそう分析していたのだが、なぜだかケンマはそのただ一人に、勇者から選ばれてしまうのだという。

ざわり、と全身の魔力が沸き立つほどに、

大王の力は絶大なもので、大王がこの世界の秩序を守る三つのオーブと巫女ミチミヤをその手中に収めた瞬間、世界が変わってしまったのを感じ取れたことも覚えていますが、ケンマには打倒大王などという大層な目的などない。ただこの世界が消えてしまふのは嫌なので、そう、仕方なく大王討伐の手伝いをする、それだけだ。

「…ケンマ」

「なに？」

クロが何か言いたげな視線をケンマに寄せす。長い付き合いで、もうクロが何を言いたいのかなど、その目一つで分かっってしまう。

「大丈夫、大王倒したらすぐ帰ってくるから」

「…わかってるけど」

「おれだって、自分の身くらい守れるから、そんなに心配しなくていいって」

クロには劣るがケンマも多彩な魔法が使える魔導師なのだ。一人では大王は倒せないが、きつと勇者たちとなら、できる。

「ケンマは強い。そんなこと、俺だってわ

かってるけど、心配なんだよ」

近付いてきたクロにぎゅうっと抱き締められる。その力は痛いほどで、クロの思いが伝わってくるようだった。

「ケンマ、お前が帰ってきたら言いたいことがある」

「え、なに、今じゃいけないの？」

「うーん、まだ、ダメだな」

「そう…」

クロが何を考えているのかは読めなかったが、きつと悪いことではない、そんな予感がした。

クロに抱き締められた体が、宙に浮いて、背中には柔らかいベッドの感触と、見慣れた天井が視界に映った。

「…嫌な予感がするんだけど」

「いいだろ、別れの挨拶だ」

「挨拶って…」

「お前が勇者について行くって聞いてから、俺もいろいろと考えててさ」

「うん？」

動けないように全身に押し掛かれている状態で見下ろされ、ケンマは息を詰める。

「お前を抱いたら、この村から出ていくわ」

「…は？」

今から抱く宣言をされた後に、さらっと、とても重要なことを言われた。

「なにそれ、どういうこと」

体を起こそうとするが、体格の違いすぎるクロの体を押し返すことなどできるはずもなく、徒労に終わり、肩を掴むだけになってしまった。

「おれ、そんな話今まで全然聞いてないんだけど」

む、と眉間に皺を寄せて睨むとクロは逆に優しい笑みを浮かべた。

「戻ってこないわけじゃない。お前が村にいない間、俺も暇だからさ、ちよつと出稼ぎに行こうと思っただけ」

「出稼ぎ…？」

村にいる魔導師は基本的に村内外からの魔法に関する依頼を受け、生計を立てている。各地にある魔導師協会に登録されている。魔導師は活動の拠点を定めることも許されていない。ネコマ村周辺は比較的治安がいいので、あまり依頼もなく、都市部の方が稼ぎには向いているといえる。

「お金がいるの？」

「まあ、そんなとこだ。お前が村に戻ってくる頃には俺も戻ってくるから、そう心配すんな。俺も危ないことはしねえよ」

「なら……いいけど」

「じゃ、もう話は終わりな」

ちゅつと音を立てて唇にキスをされ、それが合図かのようにカーテンがシャツと引かれ、部屋の照明が消された。クロが魔法を使ったのだろう。それでもカーテンの間から漏れる太陽の明るさが、背徳的な気分にする。

「ケンマ」

親指でそつと下唇をなぞられ、小さく口を開くと、クロの顔が近付いてきて、反射で瞼を閉じた。腕を首に回して、クロからのキスを受け入れる。何度も唇を重ね合わせてお互いを貪るように荒々しくキスを交わす。

「んっ、ふ……」

「は……っ」

クロの手が流れる髪をさらりと梳いて、耳たぶをふにふにと触ってくる。耳が弱いことを熟知しているからだ。

「んんっ」

それだけで感じてしまったケンマはびくっと背中を反らした。

耳を弄り倒したクロは手を下へ伸ばし、キスをしながら器用にシャツのボタンを外していく。黒いシャツが肌蹴てケンマの白い肌が露わになると、ツンと既に固く上を向いている小さな突起が二つ姿を現した。

「あ……」

唇を離れたクロはそのまま唇を下へとずらし、首筋に小さくキスを幾つも落とし、痕を残しながらケンマの薄い胸に吸い付いた。

「んっ！」

左の乳首をちゅうちゅうときつく吸われ、右は指でくにくいと摘ままれ刺激を与えられ、ケンマは漏れる声を抑えようと手の甲で口を押えた。

甘くしびれるような快感が体中を巡り、腰がじんわりと重くなる。

ケンマの体はクロからの愛撫に慣れ、もうどこもかしこも性感帯だった。最初は全く感じなかった乳首も、触られただけで自身が完勃ちしてしまうほどにまで、体を作り変えられてしまっていた。

形を変えてしまっている自身がズボンを押上げて、窮屈になっている。早く触ってほしくて、懇願の視線を送る。

「クロッ……」

名前を呼ぶと、クロは乳首をちろちろと舐めながら視線を上げた。

なんて目をしているんだらう。

まるで肉食動物、まるで捕食者。食べられてしまう、と一瞬思った。

「クロ……」

手を伸ばしてクロの頭を撫でると、ようやく胸への愛撫が止まった。

「これからしばらく出来ないんだから、もうちよつと楽しませてくれよ」

「無理。早く下触って……」

「全く、ケンマは堪え性がないんだから」言葉とは反対に楽しそうに口角を釣り上げたクロはズボンの上からケンマ自身を撫で上げた。

「あ……」

一撫でされただけでびくっと腰が跳ねた。

「もうピンピンじゃん」

「だって」

「俺が悪いんだろ」

ケンマの言葉の先を言うと、クロはケンマのズボンを寛げ、履いたままになっていた靴を脱がせ、ズボンとパンツも一気に脱がしてベッドの端に投げた。

下半身が全て外気に晒されたケンマはもじもじと膝を擦り合わせるが、太ももを掴んだクロの手によって左右に大きく開かされてしまった。

「これ、やだ……」

足を抱えあげられ、切なげに揺れる自身も、早くクロが欲しいと訴えひくつく後穴も丸見えにされ、ケンマはばたばたと足を動かして抵抗するが、クロには敵うはずもなく、力負けして諦めた。

ペロリと舌を出して唇を舐めたクロはケンマの股間に顔を埋めると、たつぷりと唾液を乗せた舌で後穴を舐められた。

「うそ、やだ、やめてっ」

今までも舐められたことはあったが、それはいつも風呂の後でまだ体が綺麗だと言える時だけだった。それなのに今は真昼間で、風呂に入ったのは昨夜寝る前だ。

「そんな、汚いっ……」

「汚くなんかない。ケンマの体はどこもか

しこも、綺麗だ」

舐められながら、じっと見つめられて、ケンマは嬉しいような恥ずかしいような複雑な気持ちで、泣きたくなかった。

ゆるゆると穴を舐めていた舌がいよいよ中に潜り込んできた時には本気で抵抗したが、勃ち上がっている自身を扱かれればそちらに気がいき、快感に身を委ねることしかできなくなっていた。

いつもの指で慣らされるのとは違う、温かくぬめる舌も気持ちいいが、長さが足りず奥が疼いてきて、ケンマは知らず腰を揺らした。

早く、クロの熱くて固くて太い肉棒で中をかき回してほしい。

熱に浮かされたように、そのことしか考えられなくなる。ケンマは気持ちいいことには従順だった。初めての頃は消極的だったケンマだが、クロの手によって従順にさせられたのだ。

「あ、クロ、もっと……！」

もっと激しい快感が欲しくて自分で胸を触る。クロに散々弄られた乳首は赤く腫れて少し痛みを感じるが、それすらも快感で、

ぐにぐにと押し潰すように弄る。

ほぐすように、中を押し広げるように動いていた舌が引き抜かれたかと思うと、指が一気に二本押し入ってきた。

「やっぱ舌じゃ限界があるよな。ケンマも指の方がいいんだろ」

舌では届かなかった奥を指で押されて、中がきゅんつと収縮したのが分かった。体は素直に反応を返していて、クロはにんまりと笑った。

ぎゅうぎゅうと指を締め付けている穴は、もはやケンマの意志とは関係なく動いている。

くば、と捻げられ、指をもう一本増やされる時さすがに苦しくなって眉をひそめた。

この先にとつともない快感が待っているのは知っているし、期待もしているが、いつもこの瞬間だけは慣れないし、きつとこの先も慣れることはないのだと思う。こればかりは男の体なので仕方のないことだ。

「ケンマ、そろそろ俺も限界なんだけど、もういいか？」

浮いていた腰が下ろされて、足がベッドに着く。

「……うん」

多少無理をしても、もう初めての時のような大参事になったりしない。初めての時はお互い手探りで求め合い、結果血を見るはめになり、最後までできなかつたという、苦い思い出だったりする。それ以降は慎重に事を進めるようになり、ケンマの体は無事に保たれている。魔導師なので多少の傷もあつという間に癒すことができるが、そんなところを治すのは、少しばかり情けなくなるので、あまりしたくない。

クロの指が引き抜かれると、すぐにクロの熱いものがびとりと宛がわれ、息を詰める。ぬるりと滑るクロの熱い肉棒はすでに先走りドロドロになっていっているのだろう。

足を抱えあげられ、ぐっと押し入ってくる指とは比べ物にならない質量に、ごくりと唾を飲み込んで、ふうーっと長く息を吐いて痛みをやり過ぎす。クロを受け入れる時の呼吸の仕方さえ、今では完璧にできるようになったが、それでも違和感は拭えない。二人が頻繁に体を重ねる関係だとしても、やはり本来は性交に使う場所ではないのだ。

「は……はあ……」

額にうっすらと浮かぶ汗をクロの指が優しく拭う。

「大丈夫か？」

奥の奥までクロが入っているのが、わかる。そしてそれをきゆうきゆうと締め付けているのもわかる。

「……うん」

欲しかったもので埋め尽くされて、胸もいっぱいになる。

弧を描くように緩く腰を揺すられ、肉壁を優しく擦られる。激しくされるのも好きだが、こうしてゆっくりと形を覚えさせられるような抱かれ方も好きだった。

「クロ」

腕を伸ばして、縋り付くようにクロの首に絡めて引き寄せれば、欲に濡れた漆黒の瞳に蕩けた顔をした自分が映っていた。近付いてくる瞳に吸い込まれそうになりながら顔を伏せると、顔中にキスが降ってきた。お互いが何を求めているのか、目を見ればわかる。

あちこち唇で触れられてから、最後に唇にちよん、と触れられ、口を開けて舌を伸

ばすと、舌ごと食われるように深く口付けられる。

それが合図になり、クロが腰を引いた。出ていってしまう感覚に、思わず両足をクロの腰に巻きつけると、勢いをつけて再びクロが奥に押し入ってきた。

「ああっ」

ぐちゅつと水音がして、奥を穿たれる。

唇で口を塞がれていても声が漏れる。「ん、あつ、ああつ」

何度も繰り返して腰を打ちつけられ、中がドロドロに溶けていく感覚がした。もうそこは完璧に性器と言える場所だった。

「ケンマッ」

はあはあと息を荒くするクロもキスをしながらではきつそうだったが、それでも離すことはしないし、ケンマも首に回している腕に更に力を込める。

「クロッ、クロオ……」

気持ちがよく過ぎて腰がびくびくと跳ねる。名前を呼んで、もう限界が近いことをクロに伝えるが、クロは前を触ろうとはしてくれない。触らなくても後ろだけでイケる体なのを知っているからだ。

「あ、あっー！」

最奥を穿たれて、びゆるりと熱い体液が中に打ち付けられ、ケンマは身悶えながら自分の腹の上に精液を吐き出した。

「は、…あ」

ドクドクと注ぎ込まれるクロの精液を受け入れながらケンマはシートの上に腕を投げ出した。

「も、疲れた…」

はあはあと肩で息をしながらクロを見上げるが、クロはまだ自身を抜こうとしない。

「クロ…？」

固さのなくなったクロが精液の溜まった穴に蓋をしている状態だが、早く出さないとお腹を壊してしまう。

「シャワー…」

体を起こそうとした肩を押され、再びベッドに沈む。

「もう一回付き合って」

ニコリと笑みを張り付けたクロの目は、キラリと光っていて、逃げられないなと悟った。

「もー…ほんとに一回だけにしてよ」

ケンマはクロに対して甘いことは自覚し

ているし、気持ちいいことに弱いことも自覚している。

「ん、めいっばい気持ちよくして、お前を天国に連れてってやるよ」

耳元でそう囁かれ、ぞわりと鳥肌が立った。クロは時々、長い付き合いのケンマでさえも耐えられないようなクサイ台詞を言う。

「…期待してる」

頬をひきつらせながら答えると、クロがいきなり精液で濡れ、ふにやふにやに萎えてしまっているケンマ自身を掴んできた。

「んっ」

びくんと反応を示したケンマはクロの手によってすぐに勃ち上がった。

「あ、クロ…だめ、すぐイっちゃう…」

いつの間にか中に埋められたままだったクロも固さを取り戻して、軽く揺すられる。

「前も後ろも、両方されるの、好きだろ？」

ふるふると首を横に振る。好きだけど、いっぺんにされたら持たない。

「嘘つきだな、ケンマは」

クロの吐き出した精液のおかげで滑りが

よくなったのか、速い抽送を繰り返され、前も抜かれ、すぐにイキそうになるのを唇を噛んで耐える。

快感に支配され、何も考えられなくなり、頭の中が真っ白になる。

「こら、唇裂けるだろ」

やめろと言うように唇をべろりと舐められ、噛むのをやめた途端、唇からは本当に自分の声なのかと疑いたくなる程の高い声が漏れた。

「あ、あ、あっ」

奥を穿たれる度に反射のように声が漏れてしまう。もう自分の意志ではどうしようもない。

「ケンマ、ほら、好きなんだろう？言わないとイかせてやらねえぞ」

もう限界だと思っていたのに、びたりと腰の動きを止められ、更には自身を抜いていたクロの手も止まり、根本をぎゅつと締めるように掴まれ、イきたいのにイけない。

熱がぐるぐると体の中を巡り、真っ白になった頭でどうすればこの熱を解放するかができるのか考える。

「す、好き…、好きっ、両方してっ」

うわ言のように吐露すれば、じわりと目尻に涙が浮かんで、零れた。

「よく言えました」

ちゅつと軽くキスをされ、零れた涙を吸い取られた。

がつんと腰を穿たれ、止められていた前もきつく扱かれ始め、与えられる快感が強すぎて、唇から漏れる嬌声も、ひっきりなしに聞こえる結合部からの卑猥な水音も、何も聞こえなくなる。

強烈すぎる快感に、本当に天に召されてしまふんじゃないかと、遠のく意識の中で思った。

「ケンマ、好きだ……」

そしてクロのその言葉を最後に、ケンマは意識を失った。

ケンマが目を覚ましたのは、その日の夜だった。既に月が高い位置に昇っていて、あれから随分と眠ってしまったのだと知った。もしかしたら、クロに眠らされていたのかもしれないが、真相はクロにしかわからない。

けれどそのクロは、もう村にはいなかった。クロの魔力を察知しようとしたが、遠くにいるようで、ケンマの力ではもう追うことはできなかった。

体も綺麗に清められていて、ベッドも情事の跡は全く残されていなかった。

まるで今日ここにクロが来ていたことさえわからないほどに。

「……なにあれ」

ぼつりと呟く。

意識を失う前、最後にクロが言っていた言葉は、はつきりと覚えていた。

（今までそんなこと、言ったことなかったじゃん）

クロとは、幼馴染で兄弟のように育ってきた。その過程でなにを間違ったか、体を重ねる関係になってしまい、ここまでずるずると続けてきていたが、その言葉を聞い

たことも、言ったこともなかった。

男同士では子は為せない。そんなこと、誰でも知っている。秘密にしなければならぬ関係だということも知っている。

だから口にしなかった。二人の関係を何かに当てはめたくはなかったから。

なのに、どうして別れる間際にそんな言葉を口にしたのか。

（まるで今生の別れ、みたい……。縁起でもない）

大王を倒してケンマが村に戻ってくる頃にはクロも戻ってくると言っていた。

（早く大王を倒して、クロに聞かなくや）あんなことを言われて、今更なかったことになんてできっこない。

ケンマも、クロを好きだったのだ。

クロが子供を為せば、きっと優秀な魔導師になる。ここでクロの血を絶やすのはもったいないと思っていた。

でも、それ以上に、クロを他の人に渡したくないとも、思っているのだ。

「……早く来て、ショウヨウ」

月が隠れて、太陽が昇れば、この村に勇者がやって来る。

予見で選ばれたからだけじゃない、大王を倒す理由が出来た。

途中になっていた身支度を再開し、今まで使ってこなかった、実戦用の杖を手に取り、魔導師の正装とも言えるフードのついたローブを羽織った。真つ白なローブは足元まであり、すつぽりと全身を覆った。

眠りすぎた体は夜でも睡眠を求めておらず、ケンマはそつと部屋を抜け出して、森へ向かった。

昔、クロと二人でよく修行をしていた場所がある。そこへたどり着くと、大木が昔と変わらない姿でそこにあった。幹は幾重にも切り傷がついており、二人で風の魔法の修行をしていたことを思い出した。今はもう昔よりも強力な魔法を使うことができる。もしかしたらこの大木も真つ二つにすることができるかもしれない。だがそんなことをすれば、村の住人達をみんな起こしてしまうかもしれないので、あまり大きな音を立てないようにしながら、ケンマは夜な夜な久しぶりの修行に励んだ。

太陽が顔を覗かせ、辺りが明るくなり始めた頃、ケンマは家に戻り、朝食を取って、

勇者達がやって来るのを、ただ待った。

勇者ヒナタは微力ながら魔力を持っており、そのおかげでケンマはヒナタの居場所を察知することができる。

村に近付いてくるヒナタの近くに強力な魔力を持つ者がいたが、きつと仲間なのだろうと思ひ、出迎えのために村の入り口まで向かった。

森を抜けてやって来たヒナタは、小さなカラスのような生き物、ヒナガラスと黒髪長身の少年と一緒だった。

ケンマの姿を発見したヒナタはびよんびよんと飛び跳ねるように駆け寄ってきた。

「ケンマ！」

「久しぶり、シヨウヨウ」

「……あなたが、魔導師のケンマさん？」

ヒナタに負けじと走ってきた、背中に弓を携えた少年がケンマを見下ろしてきた。

クロほどではないが、背が高い。

「うん……」

人見知りを発揮したケンマは自分よりも背の低いヒナタを盾にしてさつと身を隠す。

「ケンマ、こいつ弓使いのカゲヤマ。おれの仲間だから、大丈夫だ！」

「あ、うん……よろしく……」

「で、こつちがお供のヒナガラス」

ヒナタの頭の上に乗っかっている小さな生き物がじつとケンマを見つめるので、ケンマもじつと見つめ返す。小さな生き物相手だと、ケンマは平気だった。

ケンマが感じた強力な魔力の持ち主はカゲヤマではなく、どうやらこのヒナガラスのようだ。

びよんつとヒナタの頭から飛び降りたと思つたら、ケンマの持っている杖の先に降り立って、ピツと鳴いた。お気に召したらしい。

「大王を倒しに行くんでしよう？」

「うん、よく知ってるな！」

「それ、おれもついて行くから」

「おお！話が早くて助かるぜ！」

「長の子見で知ってたから……。本当はクロの方が強いんだけど……」

「クロ？あ、ケンマの友達か！」

「うん……。でも、予見は絶対だから、おれがついていくことにした。だから、早く他の仲間を探しに行こう」

ケンマが杖を一振りすると、ぽあつと足

元に魔法陣が現れて、まばゆい光に包まれた。

そうして移動魔法で簡単に移動をしながら仲間を集め、格闘家アオネと戦士イワイズミをパーティーに加え、旅の拠点となるカラスノ村に落ち着いた。

ここには勇者を支援してくれ、更には大王の情報を集めてきてくれるヒナタの保護者、スガがいた。集められた情報を元に、大王の手下がいるとされる洞窟へ一瞬で移動し、中を探索していると魔女シミズを崇め奉る雑魚タナカとノヤがいたが、瞬殺した。しかし大王の手がかりになるものはないにもなかつた。

カラスノ村に帰還して、次の探索場所をヒナタ達が決める。

(クロは今頃なにをしているんだろう)

このカラスノ村にも魔導師協会はあるが、クロの名前はなかつた。近くにクロの魔力も感じないので、もっと遠くにいるのだろうか。

はあ、とため息を吐くと、杖の先から動かないヒナガラスと目が合った。

「…なんでもないよ」

声をかけると、ヒナガラスはぶいっとそっぽを向いた。このヒナガラスは、ただの可愛いマスコットじゃないとケンマは睨んでいたが、未だにその尻尾を現さないの、泳がせることにしていた。

魔力が強くないヒナタや、魔力を持たない他の仲間達は気付いていないが、ヒナガラスは何か隠している。そんな気がするのだ。

「ケンマ！ 次の行先決まったぞー」

「あ、うん、すぐ行く」

ヒナタに声をかけられ、ケンマは地図を広げているヒナタ達の元へ向かった。

「次は、この洞窟に行こう。最近旅人が

知らず食糧を盗まれているらしいんだ」

「盗賊とかかもしれないが、そんなことできるのは、魔導師とか、魔力の強い者だけだ」

「魔女…とやってこと」

「そう」

「…分かった。みんな準備はいい？」

まだ知り合ったばかりの仲間達と目を合わせることは出来ないが、頷いたのが目の端に映ったので、ケンマは杖を一振りした。

地図上に示された場所に一瞬で辿り着いた勇者一行は道中のスライム共を蹴散らしながら洞窟の奥へと辿り着いた。

ヒナガラスのものよりも強力な魔力を感じて、ケンマは警戒値を引き上げた。

しかし、そこにいたのは、ケンマの幼馴染で、兄のような存在の、クロだった。

「…クロ」

呟くと、クロがケンマに顔を向けて、にやりと笑った。

「ケンマか」

ケンマの知っている真つ黒の瞳は悪の証である赤に染まっていて、頭からはツノが生えていた。

目の前の事態を受け入れられず、茫然とするケンマを余所に、クロと仲間達の会話は続いていく。

(クロは出稼ぎに行くって言って出ていった。目の前のクロは操られてないって言うてる…。なんで？ クロは自分の意志で大王に仕えてるの？)

わけがわからないままに戦闘が始まったが、あのクロに勝てるわけがなかった。全滅して息も絶え絶えになっていたが、

クロは大王を倒すヒントをくれた。

クロが何を考えているのか分からないまま、カラスノ村に帰還した。

どうやらアオネは回復系の薬が作れたらしく、ケンマと二人でパーティーを回復して、次の作戦を練った。カゲヤマとイワイズミは、元は大王の部下だったようだが、愛想を尽かして今は勇者側にいるようだった。可哀想に、と思ったが、二人の話聞いてみると、確かにムカつくやつだと思っただから、やっぱり倒さないと、と考えを改め直した。

そしてクロは一旦置いて、友情のオーブを持つという話を聞いた勇者一行は魔女シミズのいる洞窟に乗り込み、あっさりとオーブを奪取した。

その後、努力のオーブを持つクロの元へ向かうべく、クロが元いた洞窟に向かうと、クロはまだそこにいた。今までクロの魔力を察知できていたケンマだが、悪の力を手にしたクロの魔力は察知できなくなっていた。オйкаワの力が邪魔をしているのかもしれない。

クロには一度こてんばんに負けたが、今

度はもう手の内を知っているからか、クロに勝つことができた。

努力のオーブを手に入れると、クロは移動魔法で姿を消してしまった。もうこれでクロと戦わなくて済むと思っていたケンマは落胆した。

だが落ち込んでいる暇などない。残り一つの勝利のオーブは誰が持っているのか分からない。

情報を仕入れるためにカラスノ村に戻り、スガの持ってきてくれる情報をしらみつぶしに探してみるが、手がかりは掴めない。

そんな日が続いていったある晩、ついにヒナガラスが動いた。

ヒナタの持っていた友情と努力のオーブを盗み、近くの洞窟に逃げ込んだのだ。

やはりケンマの睨んでいた通り、ヒナガラスは悪側の者だった。警戒していたにも関わらず、持ち逃げされてしまったので、ケンマが最初から気付いていたことはみんなには黙っておくことにした。

ヒナガラスを追い詰め、オーブを取り返した勇者一行は、勝利のオーブを持っているという大王を倒すべく、大王の城に乗り

込むことになった。

ケンマの魔法で城の入り口に到着し、さっそく侵入した。今までの洞窟と同じく襲い来る雑魚をばったばったと切り伏せ、どんどんと奥に進む。

きっと、大王を倒したら、クロも戻ってきてくれるはず。そう思いながら、ケンマは杖を振るう。

そして最初の階段の前に、クロがいた。まだあの真つ赤なマントを着て、ツノが生えていて、赤い目をして、大王の部下なクロだった。

戦うしかないとわかっているけど、クロに攻撃をするのは、気が引ける。カゲヤマが弓で殴ったりなどの打撃攻撃を執拗に続け、クロを倒した。

「クロ……」

クロに視線を向けると、悪役の笑みを浮かべていたクロが、ふっと表情を和らげた気がしたが、すぐに移動魔法で姿を消してしまった。

きっと、大王を倒せば、クロは戻ってきてくれる。そんな思いは、確信に変わった。

次の階に進むと、魔女シミズと手下のタ

ナカとノヤがいた。一度負かした相手に負けることはなく、難なく倒して次の階に進むと、やはりヒナガラスがいた。ヒナガラスも瞬殺し、遂に大王オイカワの元に辿り着いた。

オイカワのずさんなオーブ管理のおかげで難なく勝利のオーブを手に入れ、大王戦も楽勝だった。

そして崩れゆく城からケンマの魔法で脱出し、カラスノ村に戻ってきた。

オーブを巫女に返し、仲間達はそれぞれ道を歩むことになった。ケンマは、早くネコマ村に帰りたい、その一心だった。

「……じゃあね」

ヒナタ達に別れを告げ、ケンマは杖を一振りし、ネコマ村に帰ってきた。

村は大王を倒し、世界に平和が戻ってきたことを祝し、宴が行われていた。すぐにもクロを探しに行きたいと思っていたが、勇者一行であるケンマは主賓だと持て囃され、とてもじゃないが抜け出せる雰囲気ではなかった。人前で喋れと言われた時は気が気じゃなかったが、なんとか「がんばりました」とだけ伝えると解放してもらえた。

日付も変わる頃になってようやく宴も終わり、久しぶりの家に戻ってきた。旅に出た時と何も変わっておらず、ほっと安堵の息をつく。

「……」

だが、クロがいない。

もしかして、城の崩壊に巻き込まれてしまったのだろうか。いや、クロを倒した時移動魔法を使っていたからその心配はないはずだ。

「……会いたい」

早くクロに会いたい一心で、無気力とよく言われるケンマが、勇者の力になるべく頑張ってきた。

世界を救ったご褒美くらい、あってもいいじゃないか。

ベッドの上に杖とローブを放って、ベッドに寝転がると、突然窓が開け放たれて、ゴオツと強い風が入ってきて、部屋の中で小さな竜巻が巻き起こった。

「な、なにっ」

がばりと体を起こすと、その竜巻は次第に力が弱まっていき、その中から、真っ赤なローブを着たクロが現れた。

ケンマは目を疑った。こんなに突然クロが姿を現すなど、思ってもみなかった。風が止み、窓が閉まる。

「クロ、なの……？」

洞窟と城で会った時と同じ赤いローブを着てはいるが、ツノはなくなり、目も以前と同じ黒になっていた。

「ああ、ただいま」

「なんで……」

聞きたいことは山ほどあった。なのに、どれも声にならず出てこない。

「ごめん」

謝るクロはゆっくりとベッドに近付いてきて、乗り上げるとケンマをそっと抱き締めた。

「何か言っちゃまうと、ケンマは力を発揮できなくなると思ったから……だから俺は最後まで大王の部下をやった」

悪の力のせいで察知できなかったクロの魔力を、近くに感じる。元に戻ったのだと、それでわかった。クロの背中に腕を回すと、いつもと変わらないぬくもりで、ケンマは目を閉じて肩に額を乗せた。

「……あれが、出稼ぎだったの？」

「まあな」

「おかげでだいぶ準備が進んだ」

「クロ、なんで黙って出て行ったの」

「いや、ホントは起きるまで待ってたかったんだけど、オイカワから召集かかっちゃまって……」

「じゃあ、なんで最後にあんなこと言ったの」

「最後？」

（それを、おれの口から言わすのか……）

つくづくずるい男だなあと思う。でも、そんなクロが好きだから、しようがない。

「……おれのこと、好きって言うってた」

口にする、途端に恥ずかしくなると、ぎゅっと腕に力を込めた。

「あ……それ覚えてたんだ」

クロに優しく腕を取られ、体を引き剥がされると、クロが顔を覗き込んできて、さっと視線を外すと、両手で頬を挟まれて、上を向かされた。視界がクロでいっぱいになる。

「ずっと、言いたかった。ケンマ、好きだ。」

「ずっと好きだった」

「……うん」

「だから、お前とずっと居られる方法を探して、オイカワのところに行ったんだ」

あまりにも突飛な話についていけなくて、首を傾げようとしたが顔を固定されていて、動かさなかった。

「この世界じゃ、男同士では結ばれない。」

なぜなら子供を作ることができないからだ。だけど、もしそれが可能なら、俺達の仲間認められて、ずっと一緒に居られるんじゃないかって、思ったんだ」

「そんなこと、できるの……？」

「できるって、言ったら？」

ケンマの頬から手を放して、ローブの中をゴソゴソと漁り、一つの小さな瓶を取り出した。中身は、ものすごい鮮やかなピンク色の液体が入っている。

「オイカワに作ってもらった。そういうものが作れるって、昔協会の本部の書庫で読んだことがあったんだ。でもそれは黒魔術の一種で、俺達には扱えなかった……」

その瓶をクロはケンマの手に握らせた。

「だからそれを作ってもらおう代わりに、俺は部下になってたわけだ」

「そんなことのために？」

ケンマは手の中にある瓶に視線を向ける。

「そんなことじゃない、俺にとっては、大事なことだ！」

「だって、それ、おれもクロのことが好きで、ずっと一緒に居たいって思ってるってことが大前提じゃん」

「……俺のこと、好きだろ？ケンマ？」

「ずい、と顔を近付けられて、瓶を握っている手を両手で包まれるように握られると、かあっと顔に熱が集まった。」

「好きじゃなきゃ、あんなことやこんなこと、やらせてくれたりしねえよな？」

追い詰められ、ケンマはこくりと一つ頷いた。

「ケンマの言葉で聞きたい」

顔の横にかかる髪の毛を耳にかけられ、露わになった耳をクロの手が揉む。びくつと反射的に反応してしまう。

きつと言わない限り、解放してはくれないだろう。

「……す、好きだよ、おれだって、クロが、好きだ……。大王の部下になってて、倒すの、

すごく嫌だったし、ずっと一緒に居たいなって、思ってる……」

叶わないと思っていた。好きって気持ち
は秘めていなきやいけないと思っていた。

こんな怪しげな液体で、それが全て解消
されるのなら、喜んで飲む。まだ用途を聞
いてなかったが、たぶん飲むものだ。

「よかった、ケンマ、ありがとう」

クロが嬉しそうに笑う。

「じゃあ早速既成事実作るぞ」

「えっ今から!？」

旅から帰ってきたばかりで結構疲れてる
んだけど、とは言い出せず、ぼいぼいと手
早く服を脱がされ、クロも服を全部脱ぎ捨
ててしまった。

「で、こいつはちよつと置いといて」

枕元に置かれてしまった瓶は、どうやら
使用用途は別らしい。

「ケンマ、おいで」

手を引かれるまま、背をクロに預けるよ
うにしてクロの上に座ると、いきなり下肢
に手を伸ばされた。

「あれは、最初にお前の精液がいるんだ」

「え、どういう…」

「説明するより実践した方が早いだろ」

まだまったく反応をしていない自身を掴

まれて、もにゅもにゅと揉みこまれる。

「んっ…」

ペロリと後ろから耳を舐められ、左手は
無い胸を揉みしだいてくるものだから、あ
つという間に高められてしまう。

「我慢しないでいいから、早く出して」

「そ、んなっ…あ、んっ」

ぐりぐりと亀頭を刺激されると、足に力
が入らなくなってきた、がくがくと震えだ
す。

尻の下にあつたクロのものが段々と形を
変えてきて、尻の間に擦り付けるように動
いてくるのも堪らない。

「あ、クロッ…」

自分でも自身を擦りあげると、びゅるり
と白濁が溢れ出して、クロと自分の手を汚
した。

「ん、いっぱい出たな」

ぐったりとクロに体を預けるケンマに見
せつけるかのように、眼前に白濁がべつた
りをついたクロの手が広げられた。

「だって、旅に出てる間、してないじゃん」

「一人でもしてなかったのか？」

「そんなの、しない…」

「…そうか」

クロがペトペトな右手で指を鳴らそうと
したが、失敗したので左手で指を鳴らすと、
ピンクの液体の入った瓶の蓋が開いて、液
体が空中に浮いた。

クロがその液体を指差して、くるくると
指を回すと液体が渦巻き始めた。そして右
手を振りかざすと、右手に纏わりついてい
たケンマの精液が、渦巻く液体に吸い込ま
れていった。

「え…!そういう使い方なの？」

「あれで卵を作るんだと。で、その後俺の
精子入れて受精卵の出来上がり」

「それだけでいいの？」

「あとは、やっぱり腹に入れなきやいけね
えんだけど」

「いいよ」

ケンマは自分の薄っぺらい腹を撫でる。

「クロとの子なら、俺頑張る」

「俺がやろうと思ってたんだけど…」

クロの申し出に、ケンマは顔を顰めた。

「クロがお腹出てるの、なんかイヤじゃな
い?まだおれの方がよくない?」

「そ、そうか…?」

「だって、卵にしたのおれのやつじゃん。だったらおれがお母さんでしょ？」

「うん、そうだな……」

「よし、そうと決まれば」

ケンマはくるりと体勢を変えて、クロに向き合おうと、緩く勃ち上がっているクロに手を伸ばして顔を埋め、べろりと舐めあげた。

「なっ！ケンマッ」

「ほら、クロも早く精子出して。要るんではよ？」

「そう、だけど……。フェラなんて自分からはしてくれなかったのに……」

「そりゃ……美味しくないもん」

「ごしごしと竿部分を抜いてやればすぐに元気になって、十分な角度になると、ちろちろと舌で鈴口をくすぐってやれば、とろりと先走りを零した。舌の上に独特な苦味が広がるが、表情には出さず、そのままばかりと銜え込んで、舌を絡めながら頭を下に動かしてクロを追い立てる。

「はあ……ケンマ、最高すぎ……」

頭を撫でられ、銜えたまま見上げると、蕩けた目をしたクロがケンマを見下ろして

いて、出したばかりなのにまた腰が疼いてきた。

「あー、もう出そう、ケンマ、顔上げろ」

クロの言葉で口を離し、仕上げとばかりにちゅつとキスをして、竿を抜けば、びゅると勢いよく精液が吐き出され、べつたりとケンマの顔を汚した。

「顔射された……」

「顔離さねえお前が悪いだろ」

そう言っただけでケンマの顔に指先を宛て、白濁を吸い取るように指を動かし、丸いボール状になっている元液体の中に流し込んだ。

「……あんなに精液要るの？」

「俺に聞くな」

「そんな曖昧でいいの？」

「なんとかなる。たぶん」

元液体の中に流し込まれたクロの精液はそのまま中でぐるぐると回り、一体化していった。

「で、これを……」

ボール状のそれを手繰り寄せて掴んだクロは、そのままケンマの腹に押し付けた。温かく、それでいて不思議な魔力を感じるそれに向かって、クロがブツブツと呪文

を唱えると、すうっと、ケンマの体の中に入ってしまった。

ケンマも魔導師なので何が起こっても基本的に驚きはしないが、自分の体の中にもう一つ命が宿ることは、不思議で仕方なかった。

「……大丈夫か？気持ち悪くないか？」

「うん、平気」

腹に手を宛て、中を感知するが、特に問題はなさそうだ。きちんと内臓をかき分けて場所取りをしている。

「……子供産む時は、お腹切らなきゃだね」

「悪い……。痛くないように魔法かけるし、傷痕も残らないようにするから」

「うん」

クロの手が、そっとケンマの腹を撫でた。

「ケンマ」

「なに？」

「……続き、してもいいか？」

「……母体を大事にしようとか思わないの？」

至極真面目な顔のクロに真面目な顔で返すと、ぐぬぬ、と悔しそうな顔をして、がくりと肩を落とした。

「嘘。いいよ、おれもしたいから。でも、

優しくしてよね」

「…ケンマア！」

ぎゅっと抱き締められたかと思うと、そのままベッドに押し倒された。

「ケンマのことも、これから生まれてくる赤ん坊のことも、もちろん大事にする！だから、俺とずーっと一緒に居てくれ！」

「…うん、クロも、おれとずっと一緒に居てね。もう、何か考えがあっても、大王の部下になんてならないで」

敵として対峙した時、本当に心臓が止まるかと思つたのを、覚えている。けれど、きつと次の大王が現れることは、二人が生きている間にはないだろう。

「うん、ごめんな、ケンマ」

謝りながら、頬や額、頬、顔中にキスをしてくるクロの背中を優しく撫でながら、その先を強請る。

「さつきから、クロがほしくて堪らないんだけど。早くして…」

クロに扱かれていた時も、クロのものを舐めていた時も、早くクロが欲しいと、奥が疼いていた。最後に抱かれてから、三週間は経っているはずだ。たった三週間。さ

れど三週間。二人は初めて抱き合ってから、

時間がある時にはいつだって抱き合っていて、ほぼ毎日、日が空いても最長が四日ほどだった。三週間はあまりにも長かった。

「俺だって、早くケンマを抱きてえけど、痛いのは嫌だろ？」

液体に吸い込まれなかつた精液を集めて、クロの指がケンマの後穴に触れた。

「ちゃんと慣らすから、待って」

男の体は受け入れるようにできていないので、自然と濡れることはない。きちんと慣らさないと、血を見る。あんな痛みはもう二度とごめんだと思つているが、それでも早く欲しいという思いが先に出る。

ゆっくりと撫でまわしていた指が、ぐつと押し入ってくると、一本でも息が詰まった。

気持ち急ぐのに体が追い付かない。久しぶりの行為に、体も緊張している。

「ケンマ、自分で前触ってる」

「ん、うん…」

クロが丹念に後ろを慣らしながら、平らかな胸にある飾りのような乳首に舌を這わしもう片方を手で摘ままれた。

「あ、ん…」

両方の乳首を攻められ、後ろも弄られ、自分で前を扱っている。全部を一気にされたら、気持ち良すぎて前みたいに意識を失ってしまふかもしれない。

「あ、う…クロッ…」

気持ちよくなればなるほど、やはり奥が物足りなくて、クロの名を呼ぶ。

「はいはい」

ずぶずぶと三本目の指が中に埋められていくのが分かつて、異物を追い出そうと中が蠢く。

「おい、指食いちぎるつもりかよ」

「だ、だって…」

じゅうつときつく乳首を吸われ、びくつと腰が跳ねた。

中にある指が壁を押し広げるようにばらばらに動く。届きそうで届かない奥に早く触れてほしくて、ぎゅうう、とクロの指を締め付けた。

「も、いいから、クロ…」

扱っていた手を止めて、自分で膝裏に手を差し入れ、持ち上げて足を開くと、クロがごくりと喉を鳴らした。

「そんなはしたない子に育てた覚えはねえ
んだけどな」

「嘘ばかり。クロ、これ好きなもの知って
るんだから」

自分で足を開き、クロを招き入れる体勢
を取るのには、確かに恥ずかしいけれど、そ
れすらも超えて、早く欲しい。

指が引き抜かれ、既にガチガチになって
いるクロが見えて、ケンマもごくりと喉を
鳴らした。

「挿れるぞ」

「うん……」

ぬるりとした先端が押し当てられ、ずぶ
ずぶといとも簡単に飲み込んでいく。

「うっ、あ……」

クロに足を掴まれて、ぐっと押し込まれ
るように腰が進められ、ぐぶんっと音がし
て、全て銜え込んだのがわかった。

「あ……久々のケンマだ……」

熱い肉棒をぎゅうぎゅうに締め付けなが
ら乱れた息を整える。

「これ、これが欲しかった……」

ゆるゆると腹を撫でる。体内にクロがい
るのがわかる。

「お気に召したようでなにより」

緩く腰を送られ、奥に当たる度に声が漏
れる。

クロが体を倒してきたので、その首に腕
を巻きつけて、足もクロの体に巻きつけて
おく。

あーん、と口を開ければ唇で口を塞がれ
て、唾液を送り込まれるようなキスを繰り返す。

「ん、んむ、は……」

唾液の絡まる水音が響いて、気分も高揚
してくる。クロに動いてほしくて、ぎゅっ
と締め付けて軽く腰を揺らせば、思い出し
たかのようにクロが抽送を始めた。

ずん、ずんと奥を穿たれると、あ、あ、
と断続的に声が漏れるが、ケンマの声は全
てクロに飲み込まれてしまう。

二人の荒い息と、段々と大きくなってい
く水音が部屋の中に響く。

（気持ちいい……）

まだはつきりとしている頭で思う。ずっ
とこの優しい気持ちよさが続けばいいのに
と思うが、やっぱり最後には物足りなくな
って、動きは激しくなるし、出さなければ

すっきりしない。

「ん、ふっ……」

いいところばかり突かれ、限界はもうす
ぐそこまで来ていた。

ぶるぶると足が震えたのがクロにも伝わ
ったのか、一際大きく奥を突かれ、びくん
と腰が跳ねてびゆるるると精液を吐き出し
てしまった。射精のタイミングでぎゅうう
っと中も締め付けてしまい、クロもぶる
ると震えて、中に熱いものが叩きつけられ
たのがわかった。

じんわりと腹の中に広がる温かさに満足
して四肢をベッドに投げ出した。

ちゅっとりップ音を残して唇を離れたク
ロは、今日は一回で満足したのか、萎えた
自身を引き抜いた。栓がなくなると、中か
ら精液が零れ出しているのがわかったが、
体を動かすのも面倒で放っておくことにし
た。

「大丈夫か、ケンマ」

優しく腹を撫でるクロの目は、もういつ
ものクロで、情欲の影はどこにもなかった。

「……うん」

「これからはあんまり中出ししない方がいい

いかもな……。何かあってからじゃ遅いし」

「そうだね」

「……ん？」

腹を撫でていたクロの手がびたりと止まった。

「何？」

クロに手を引っ張られ、自分の腹に手を宛てると、さっきまで感じていた魔力が感じられなくなっていた。

「え、どういうこと？」

「……魔力が消えてる、よな？」

「うん」

もっとよく探るが、確かにあったはずの卵がどこにもなくなっていた。

「いつの間に消えたんだろ……」

「……失敗、なのか……」

「クロ……」

顔を伏せたクロになんと言葉をかけるべきか迷っていると、クロはぱちんと指を鳴らした。

すると、クロのロープの中からさつきと同じ、いや、微妙に中に入っている液体の色が違う瓶がざっと十個は出てきた。

「実はあれ、試作品第一号なんだ」

「……え？」

「あの薬は寝かせれば寝かせるほど効果が現れるらしくてな。やっぱりオイカワの言葉は本当だったらしい。大丈夫だ、心配しなくても鍋ごともらってきてるから、またチャレンジしよう！」

「え、あ、ウン……」

ケンマはとりあえず、頷いておいた。

その日はもう二度ほど挑戦したが、どちらもすぐに消滅してしまい、諦めることになった。

クロの浮遊魔法で風呂場まで運ばれたケンマは、自分で中に指を入れ、クロの精液を掻き出した。お湯に流されていく白濁を目で追いながら、ぼんやりと考える。

（本当に、子供が出来たら……）

今まで曖昧にしか描けなかったクロとの未来が、鮮明に描き出せるような気がした。「ケンマー！掃除終わったから俺も一緒に入らせて」

ぐちゃぐちゃになったベッドの掃除を魔法で終わらせたクロが風呂場に侵入してきた。

素早くケンマの背後を取ると、掻き出し

たばかりの後穴にずぶんと指を入れてきた。

「クロ、もう精液全部出したから抜いて」

「マジか！先にやられた……」

がつくりと肩を落としたクロに指を引き抜かれると、腰をがっちり掴まれ、あ、と思った瞬間には、中に猛ったクロをぶち込まれていた。

「あ、ああっ」

「ごめんなー俺やっぱまだやり足りなくて」

「も、バカッ」

やめて、とは言えず、壁に手をついて、どうにか体が崩れ落ちないように体を支える。

「いいよ、俺ケンマバカだから」

ずっずつと腰を進められ、背後から首筋にキスをされる。

「あ、あ、あっ」

部屋でした時とは違い、風呂場に声が響き、思わず耳を塞ぎたくなった。

「風呂場、いいな。ケンマの可愛い声がよく聞こえる」

「う、あ、やつ……」

「もつと、の間違いだろ？」

ぱちゅん、ぱちゅ、と大きな水音がより

一層響き、背後から伸びるクロの腕に支えられながらも、前を扱かれれば、限界なんてあつという間で、ケンマはすぐに精液を吐き出した。ぶるりと体を震わせ、じわりと中に広がる熱に、はあ、と息を吐いた。

シャワーで流されていく精液が、なんだか虚しく見えた。

「ケンマ、やっぱりさ」

シャワーに打たれながら、クロが後ろからぎゅうつと抱き着いてきた。

「子供なんていなくても、俺はこれから先ずっとお前を手放すつもりないから、そのつもりでいて」

いつも大きく自信満々なその声が、シャワーにかき消されてしまうんじゃないかと思うほど小さくて頼りないものだったから、ケンマは「うん」と頷くことしかできなかった。

子供がいてもいなくても、世界から認められまいと、ケンマにはクロしかいない。

皮肉にも、世界を危機に陥れた大王オイカワから授かった秘薬で、子を為そうともがいたクロを、ケンマは責められない。

好きな人と一緒に居るためならば、どん

な手段も厭わない、そんなクロをケンマは選んだのだ。

「ね、クロ、…村を出ようか」

「え？」

「おれさ、協会から報奨金いっぱい貰えるんだ。それこそ、もう働かなくていいくらい。だからさ、村を出て、どこかで二人で暮らそうよ。ね？」

「くくくケンマア！」

くるつと体を反転させられ、正面からぎゅうぎゅうと力強く抱き締められた。

「痛いよ、クロ」

シャワーの音に混じって、鼻をすする音が聞こえた気がしたが、ケンマは聞こえてなかったことにした。

そうして二人はネコマ村を出て、クロが大王の部下になっていた時に住んでいた洞窟近くに家を建て、幸せに暮らしましたとさ。

ちなみに子供作りはあれから何度も挑戦し、無事に子供を授かったのは、それから十年も後だったとかなんとか。

おわり

くろけん

HQ!QUEST FAN BOOK

はっこう : 2015.10.11

LoveWarrior & Pichichi

Love Quest

QUEST KUROKEN

FHQ

LOVEQUEST

KUROKEN

FHQ

LOVEQUEST